

氏名	山海 千保子		
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）		
学位記番号	博乙第 2788 号		
学位授与年月	平成 28年 3月 25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	育児中の母親における対人的ストレスの特徴 —母親の育児ストレス場面を想定したイラストを使用して—		
主査	筑波大学教授	教育学博士	徳田克己
副査	筑波大学准教授	博士（人間科学）	青木佐奈枝
副査	筑波大学教授	博士（医学）	江守 陽子
副査	茨城県立医療大学教授	博士（医学）	山口 忍

論文の要旨

本研究の目的は、育児中の母親における対人関係に焦点をあてた育児ストレス場面をイラストで表現し、母親の「建前」と「本音」と両者間の「ギャップ」を測定するために、「育児場面のイラストを用いた育児ストレステスト(以下、本テストとする)」を試作し、それを用いて母親の心理的特徴と、本テストにおける母親の反応を比較、検討したものである。以下、1. 「育児場面のイラストを用いた育児ストレステスト」の作成手順、2. 母親の自我状態・行動・心理的特徴と本テスト結果の関係について述べている。

1. 「育児場面のイラストを用いた育児ストレステスト」の作成手順

24枚のイラストによる育児場面のテストを試作し、2回の修整を経た後、23名の回答を分析した。その結果、「建前」は「受容」「条件付受容」「非受容」の3つに、「本音」は「ポジティブ感情」と「ネガティブ感情」の2つに分類できた。「ギャップ」はどの場面でも認められたが、研究者が「ギャップ」の程度を判断することは困難であった。回答に迷うものや、育児ストレスを判断するには不適切な場面を除き、最終的に18枚に減らし第1版とした。

2. 母親の自我状態・行動・心理的特徴と本テスト結果の関係

母親の自我状態や行動および心理的特徴と、本テスト結果との関係を探る目的で、307名の乳幼児を持つ母親に対し、新版 TEG II (東大式エゴグラム：以下 TEG II とする)、日本版 POMS (Profile of Mood States：以下 POMS とする) と本テストを同時に調査した。

その結果、カテゴリー分類や「ギャップ」の評定の検査者間一致度は、「建前」と「本音」は 80%以上であった。TEG では、CP (批判的な親) の「低群」が「高群」に比べ有意に「ギャップ」が多く ($f=4.592$, $p=.011$)、A (理性的・理想的) の「高群」が「低群」に比べて有意に「受容」 ($f=4.494$, $p=.012$) と「ギャップ」 ($f=3.524$, $p=.031$) が少なく、「条件付受容」が多かった ($f=4.713$, $p=.010$)。FC (自由な子ども) では「低群」が「中群」に比べ有意に「ギャップ」が多く ($f=3.670$, $p=.027$)、AC (順応した子ども) では「低群」が「高群」より、また「中群」より「高群」が有意に「ギャップ」が多かった ($f=7.304$, $p=.001$)。

POMS と、「ギャップ」得点は、T-A (緊張・不安) の「高群」が「低群」「中群」に比べ「ギャップ」が多く ($f=11.581$, $p=.000$)、「中群」が「低群」に比べ有意に「ギャップ」が多かった。D (抑うつ・落ち込み) では「高群」が「低群」に比べ「ギャップ」が多かった ($f=3.486$, $p=.032$)。

TEG II と本テストの比較により、母親の自我状態の程度によっては「ギャップ」を多く持つ可能性があることが示唆された。また、緊張や不安、抑うつが高い母親には「ギャップ」が多くみられたことから、ストレス状態と本研究によるギャップ得点は関連すると考えられた。

よって、本テストは母親の精神状態を把握できる可能性がある。

3. 結論

本テストは活用が簡便であり、母親の共感を得やすく、対象が興味を持って参加できるテストであると思われる。また、「ギャップ」は、母親の自我状態や精神的な健康度と関係があるため、「ギャップ」に注目することは、有用であると考えられた。本テストを活用することによって、育児ストレスが測定可能で、母親と看護職者がうちとけて相談でき、それが支援につながれば、本テストの作成意義はあると考える。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究における育児中の母親の対人関係に焦点を当てて作成された育児ストレステストは、さまざまな育児ストレスを想定した場面と育児経験者の評価により作成されたテストである。本研究は母親の育児ストレス研究から育児ストレスの要因を明らかにした上で、通常行われている質問紙法以外の方法でイラストを用いて作成した 18 の場面から、母親の内面における葛藤を「建前」と「本音」の「ギャップ」によって評定するオリジナリティの高い研究である。また、面接に用いることによって、母親を支援する者との関係性をみながら、育児中の対処方法の改善策を考え、育児ストレスの軽減が期待できるテストである。

以上、研究の意義、オリジナリティ、研究成果、論文のまとめ方において、博士論文としての水準に達していると判断される。

平成 28 年 1 月 7 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

なお、学力の確認は、人間総合科学研究科学学位論文審査等実施細則第 11 条を適用し免除とした。よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。